

『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』 試訳 (二)

北 館 佳 史

本稿は『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』の試訳である。今回訳出したのは前回の続きにあたる第1巻の17章から30章、第2巻の序言から7章までである。

翻訳の底本としてはオブランの校訂版 (Aubrun, M., ed., *Vie de saint Étienne d'Obazine*, Clermont-Ferrand, 1970) を使用し、章と段落の構成は同書に従った。現代語訳としてはオブランの同書の仏訳とペピンの英訳 (*The Lives of Monastic Reformers, 1: Robert of La Chaise-Dieu and Stephen of Obazine*, trans. H. Feiss, M. O'Brien & R. Pepin, Collegeville, 2010, pp. 129-255) を参照した。

聖書引用は『新共同訳聖書』に依るが、文脈に合わせて一部変更を加えた。

17. 兄弟たちは毎日一時課やミサの後に集会室に集まった。そこで院長の出席の下、朗読が終了した後に、慣習に従ってどんなことが話されたとしても、すぐに掟や規律や慣習について話し合われ、不適切なことはすべて適宜矯正された。それから、自分に罪があると分かっている者があれば、自ら償い、また、他人から非難を受ける者があれば、罰に服し、あたかも神の裁きの前に立つようにして改悔を行った。罪の重さに応じて重い罰や軽い罰を受けるようにした。さらに、自己弁護をして罪を増した者は犯した罪が軽かったとしてもより厳しく懲罰された。実際、不承不承ではなく進んで敬虔に償いをした者は、より重い罪を犯したにもかかわらず、より

軽く処罰された。もし鞭で打たれなければならない者があれば、肌を露わにした後に、詩編 50 番の朗誦が始まり、一章句ごとに一回鞭打ちされた。もし罪が重いならば、多くの鞭を受けるように、もっと長い詩編が追加された。

慈悲に満ちた主の晩餐の祝日には、前の年に犯したすべての罪が聖なる莊嚴な赦免により消し去られるように、すべての者が嘆願して赦しを求めた。すると、この尊敬すべき年長者は涙に濡れて、目の前で自身の罪を思い起こし、神の慈悲を信頼し、自分自身と他人に赦免を与え、神の言葉で罪の鎖を解いた。ああ、どれほどの涙が流れ出たのか、どれほどの呻きとどれほどの心からの嘆息が出たのか。心を突き刺されて嗚咽しない鉄の心を持った者はそこにはいなかった。罪の赦しが実現される聖霊がその場にはいないと信じる者がいただろうか。

罪が求めるところに従っていつもよりも厳しく誰かを鞭で打ったときには、自分自身が同じようにされる用意をし、一人か全員に自分を打つように命じた。このようにしたのは、他者を裁く者が自身の苦痛を免れることがないように、そして行き過ぎた矯正で判断を誤るようなことがあったならば、自分自身の身体を処罰して償うようにするためだった。これに加えて、他人から秘かに私的な懲戒を受けない日は、とりわけ四旬節にはほとんどなかった。こうして私的にも公的にも鞭打たれ、キリストの受難のスティグマを自身の身体に帯び、使徒とともに言うことができた。「むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです」(一コリ 9：27)と。

18. 終課の後には兄弟たちはいつも眠るために集まったが、神の人は礼拝堂によくとどまって、一晚中涙を流して徹夜と祈禱に熱心に励んだものであった。天上から涙の恩寵を賜ったので、祈禱のために平伏すると直ちに聖人の目から涙があふれ出た。ある日、私が祈禱のためではなく、私的

な用事を果たすために、彼に気づかれずに、教会の一つに入ったときのことを思い出す。彼は外の前庭で俗人たちとある用事について話していた。そのとき、突然、彼らを置いて教会の中に入ってきて、そこに誰もいないことを知ると、祈祷のための姿勢で平伏したが、非常に純真かつ謙虚だったので、そこに誰かいたとしても、彼の言うことを聞ける者はいなかっただろう。頭を床に打ち付けると直ぐに、滴ではなく、言わば、川となって彼の目から涙の洪水があふれ出した。鼻の頂から床へと涙が流れ出るのを私はこの目で見たのだが、咳も吐く音も嘆息も全く聞こえなかった。私は泥棒のようにその場で恐れ震えて釘付けになったが、彼に見られることはなかった。十分に涙を流した後に、誰にも気づかれずに、まるで自然の必要のために進むように、彼は来たときと同じ純真さで帰った。私たちがこの話を語ったのは、どれほどの熱意でいつも祈祷に取り組んだのかが知られ、同時に多くのことに縛られていたのが一時的に解放されたときにどれほどの恩寵を得ていたのかが考慮されるようにするためである。そのため多くの世話の義務のせいで彼が霊的な熱意から遠ざけられることはなかった。

19. さて、夜に教会に一人でいたときに、どのような涙と嘆息で彼が神の耳を襲ったのか、どれほどの執拗さで打ち勝って、家の主が起きてきて必要なものは何でも与えるよう強いたのか（ルカ 11：8 参照）を言い表すのは簡単ではない。実際、父たるエティエンヌは、一時的であれ永遠にであれ、神の恩恵に値しないことは一度もなかった。「主を畏れる者にも、まことをもって主を愛する者にも欠けるものはない」（王上 12：24 参照）、さらに、「主に求める人には良いものの欠けることがない」（詩 34：11）と書かれている。彼は「何よりもまず、神の国と神の義」（マタ 6：33）を求めた。すなわち、永遠の真の財産を、さらにその他についてあらゆる利益を良き父から手に入れることを疑わなかった。しかし、今は地上のことや儚いことに不適當なまでに心を悩まし、天上のことに考えをめぐらさな

いたために、私たちは地上と天上のどちらについても豊かでなくなっている。私たちは天上の財産を第一に、なによりも求めるように命ぜられているので、残っている他のものへの配慮は神のはからいに任せなければならない。それだから、聖ペトロは「思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、わたしたちのことを心にかけていてくださるからです」(一ペト5:7)と忠告するのである。

長い間祈り、非常な寒さに苦しんだとき、直ちに立ち上がり、全身が汗だくになるまで片膝を曲げ続けた。それからカッパを脱いだ後に、ついに労力で消耗し、徹夜の重荷で疲弊し、止めるか眠りにおちるまで、同じことを繰り返した。その結果、彼が祈りの姿勢で眠っているのを徹夜のために来た兄弟たちはよく発見した。

20. その上、夜の間に、もし状況に迫られ、ひっそり行うことができるならば、他の人はあえてしようとはしなかったことだが、修道院の便所を熱心に、きちんと清掃した。大きなかごとをとり、見た目も恐ろしい汚いものをかき集めて、自分の肩に乗せて遠くに運び去った。

彼がこんなものを運ぶのを見つけた者は大いに驚いて、なぜこれほどの人がこれほど屈辱的なことに身をやつすのかと尋ねると、即答した。「兄弟よ、驚くことではない。土が土によって、糞が糞によって運ばれるのだ。私たちはこの汚物へ、そしてはるかに汚いものへと帰るのだから」。実際、こうすることで、私たちの罪の汚さを厭われず、聖なる肩に乗せて運ぶことを拒まれなかったお方を彼は真似ていたのであった。

21. 昼の間に、時に一人で、時に兄弟たちとともに働いたが、彼が一人で行ったことを二人の者でもほとんど試みることはできなかっただろう。彼はこの力を豊富な、もしくは質の良い食物からではなく、魂の内的な活力から得たが、この活力は非常に強く、外的な四肢を大いに強壮にした。他の人々の四肢よりも徹夜と断食で苦しめられたが、他の人々以上の活力で労働したので、使徒とともに「働いたのは、実はわたしではなく、わた

しとともにある神の恵みなのです」（一コリ 15：10）とすることができた。

さらに、彼はよく台所仕事を行ったが、兄弟たちが元気を回復するようによく奉仕し、彼らが回復した後に、他ならぬ残り物から自分のために食事を用意した。この点で節制ではなく謙遜と卑下の手本を示すことを望んだ。謙遜の第6段階において修道士が卑しい最低のもので満足するように定められているように¹⁾。実際、人の目につく限りで、下の者たちの残り物を食べ、便所を掃除することより卑しく、惨めなことはあるだろうか。確かにこれは使徒が自らと自らに似た者について「今に至るまで、わたしたちは世の屑、すべてのものの滓とされています」（一コリ 4：13）と述べたことである。

22. 主日には彼と兄弟たちは読書とミサの執行に専念し、回廊で行列を行い、それぞれの建物を祝福して回った。また、土曜には聖母マリアに敬意を表して九つの朗読と二つのミサで祝い、慈悲深い神の母の名誉と敬意のために祝日の歌で飾った。しかし、ユダヤ人のように振舞っていると見られないようにこの日は仕事を休まなかった。また、別の祝日には非常に壮麗な調べで神の称讃に身を捧げ、大規模な修道院のやり方を模倣するように見えるほどであった。

この修道院は規模ではなく功德において偉大であり、空間ではなく聖性において広大であり、財産ではなく徳において豊かであった。この指導者は肉体は並みだが、霊は偉大であり、背丈は低いが、魂は気高く、外見は卑しいが、道徳的に高潔で優れていた。身なりはみすぼらしいが、仕事は卓越して輝かしく、生まれは低いが、徳の高貴さでそびえていた。聖なる貧しさの功德と神の知恵の教えにより模倣に値するどころか望ましいとすべての者に思われたが、まるで財産は豊かだが恩寵に乏しいかのよう

に、贈り物を持って様々な敬虔な人々の場所を訪れ、援助を提供し、祈祷の保護を自らに得ようとした。

23. 9 マイルほど離れたダロン修道院を頻繁に訪れ、自らに与えられた

物からできる限りの贈り物をこの兄弟たちに与えた²⁾。あるとき、そこに向かっているときに、ヴェゼール川のほとりで船を待って座っていたことがあった。彼はパンを積んだロバを連れた少年をお供にしていた。夜の沈黙の中で神に詩編を朗読していたとき——当時は夜に移動したものだだったが、この習慣は後に変わった——遠くから盗賊の一団が略奪品を携えて騒々しい声をあげて自分の方に急いで来るのに気づいた。ついに彼を取り囲むと、何者で、どこから来て、ここで何をしているのかと図々しく尋ねた。神の人は夜の沈黙の重みに妨げられ、神の徹夜に専念して何の返事もしなかった。それで、彼らはいつそう苛立ち、激しい怒りに心を乱され、鞘から剣を抜いて、早く答えないと殺すぞと脅し始めた。話すかまたは死ぬか強いられたとき、彼は死を選び、首を差し出した。突然、ある神の力が盗賊たちを大いに恐れおののかせ、追う者は誰もいないのにまるで敵に追われるかのようにして全員が逃げ始めた。賊たちは彼を害することも運んでいたパンに手を触れることもできなかった。人の手ではなく神の力が守ったのだった。詩編作成者が述べたことがここに実現された。すなわち、「主の使いはその周りに陣を敷き、主を畏れる人を守り助けてくださった」（詩 33：8）。聖書は同様に「神に従う人は若獅子のように自信がある」（箴 28：1）と述べる。

朝に訪問先の院長にこのことを簡単に話したところ院長は大いに驚いた。しかし、そのような状況、とりわけ尋ねられたときには、愚か者たちを怒らせないように、沈黙を守ろうとは考えないほうがよいと助言した。だから、将来の者たちが安全なときにどれほどの熱意で課された沈黙を守らなければならないのかを理解するように私たちはこのことを語るのである。彼らの師は沈黙を破るよりも死ぬことを選んだのだから。

至るところ様々な修道院を訪問して回り、そこで見た清廉と規律の手本を遵守するように兄弟たちに提案するのが彼の習慣であった。こうして様々な花を集めて非常に甘い蜂蜜をつくるミツバチの仕事を思慮深く真似

たのだった。

24. さらに、シャルトルズの修道士たちの評判を聞いて——当時は評判のおかげで他の修道者たちよりも名声が高かった——視察するために魅力的だが困難な旅に出た。この旅で多くの空腹や寒さの苦痛を経験した。通過した場所は、いつでも寒いところであったが、このときは特に冬で雪に覆われていた。徒歩で、時には裸足で歩き、食料はなにも持たなかった。彼の旅の連れは二人の聖職者の兄弟であり、彼らとともに詩編を途切れることなく唱えた。困ったときに彼らに奉仕する従者が一人いた。

このときに彼は上述した銅鎧を着用しており、少なからぬ難儀をもたらした。ある日、彼が最後尾を一人で歩いていたときに、突然、まるで誰かが輪切りにしたように、銅鎧が真ん中から裂け、下の部分がそのまま地面に落ちた。深く悲しんで、仲間のうちの腹心の者をこっそりと呼び、その助けて銅鎧をできる限りひもで縛りつけ、もう一度着込んだ。少し歩いたところで再び裂けて落下した。だから、前と同じ方法で、もっとしっかりと修理し、再び着用した。しかし、三度目に裂けたときに、兄弟の忠告も聞いて、聖なる人はこれ以上この鎧を着用するのは神の意志ではないと悟った。そこで、近くの村で打ち砕き、必要な目的のために利用することにした。こうして不本意ではあったが、神の意向によりこの重荷から解放された。この銅鎧を手に入れる前には鉄の鎖を身に着けていたと言われるが、これも短い間に三度壊れて、この銅鎧を着用することになったのだった。銅鎧は重いのに加えて、粗いために体に重くのしかかっただけでなく、体を非常に痛めつけた。

25. 旅の必要からリヨンに至ったとき、ある律修参事会の修道院に入り、泊めてくれるように頼んだ。彼らは受け入れられなかったばかりでなく、侮辱を受けて追放された。都市の通りを歩いていたところ、リヨン教会の評判の高い聖職者の一人が彼らを歓待し、親切に対応してくれた。

夜に起きて朝課を唱えていたときに、突然、都市で騒ぎが起こった。そ

れで家の主人は窓際に行き、何が起こったのかと通行人に尋ねた。ある男からあの修道院が火事で全壊し、誰も助けに行けないのだと言われた。これを聞いて、上述した神の人の従者は狂喜し、前日に加えられた侮辱を思い出して呪いの言葉を投げつけ始めた。そのため、この悲しい出来事をあえて喜び、むしろ侮辱したことでこの者は後で厳しく懲らしめられた。しかし、彼らには当然のことが起こったのであった。その僕たちにおいてキリストを追放した者が、火事により自分たちの住まいから追い払われたのである。

26. シャルトルーズに到着すると、そこの兄弟たちから非常に親切に歓迎された。この日は教会の献堂の祝日であり、全員が一堂に会していた³⁾。確かに他の日には兄弟は個々に自分の房に一人でとどまるが、祝日や主日には全員が教会や食堂や他の習慣的な集合場所に集まるのである。一方、祝日が終わると自分の房に戻ることになる。修道院は冬山に囲まれ、房は互いに50クビトゥス隔てられていた。この頃、巨大な雪の塊が崩れて下の方に落下する出来事があった⁴⁾。兄弟たちの房は一杯で、雪崩は彼らの多くを押し流し、住んでいた者の命を奪った。10日後に近隣の人々がこの話を聞いて彼らを掘り出そうと至る所から集まったとき、埋もれた人々の中に一人まだ息をしている者を見つけ出した。これほどの災難を生き延びたので人々は思いがけなく大喜びして、すぐに暖炉にこの者を運んだ。そこで息を少し吹き返し、話せるようになるとすぐに院長を来させ、告解を行い、罪の赦しを受け、臨終の聖体を拝領して、幸福に息を引き取った。他の者たちが永遠の休息に迎え入れられたこと、この者が罪の赦しで救われて死んだことを疑う者があるだろうか。

それで、神の人はこの場所の院長と親しく会話したが、賢慮に満ち、信心に基づいた人物であった。エティエンヌは院長がどの修道生活の道を選ぶのがよいと思うかについて助言を求めた。自分も兄弟たちもこのように修道会の慣習を受け入れるつもりであり、あなたがたの助言と意志に従っ

てあなたがたの修道生活を受け入れるためにここに来たのだと述べた。これに対して最近誕生したシトー会が王道を歩んでおり、完徳には彼らの規則で十分であろうと院長は答えた⁵⁾。「私たちについて言いますと、人の数と財産に限界が定められております。あなたは神に奉仕するために多くの人を集め、さらに多くの人々を受け入れることを決めておられます。ですから、多数者と少数者のどちらにも開かれている共住的な制度のほうを求められるのがよいでしょう。数ではなく、修道生活によって判断され、財産ではなく、徳によって評価されるのですから」。この言葉を聞いて、まるで神から与えられたかのように喜んで、この院長の助言を受け入れ、自分の場所に戻った。

27. シャルトルーズから帰ると、兄弟の数が増えたので小さくなった修道院の建物を拡張することを神の人は決心した。まず、聖所から始め、シャルトルーズの教会に倣って、神の母聖マリアに捧げた教会を建設し始めた。

兄弟たちが教会を建てている間に、この土地の領主の一人は、この建物が敵の避難所になり、自分の破滅の原因になることを恐れ、力を誇示して兄弟たちを止めに来た。この者の脅迫を大いに恐れ、兄弟たちは当初の気力を失って、きちんとした漆喰も使わずにほぼ2日間この作業を続けた。神の人は留守にしていたが、戻ると、壁が漆喰ではなく、泥で接合されていて、不格好であるだけでなく脆弱であることに気づいた。兄弟たちを叱責すると、次に建設の材料と方法をもとの状態に戻した。これを聞くと、かの領主は反対するために再び戻ったが、神の人は彼に話しかけた。「ああ、不義で悪意に満ちた者よ。なぜお前は神の僕たちを迫害するのか。なぜ聖なる仕事を破壊しようとするのか。悪魔が私たちを妨害するのに他の者を見つけないことができなかったからなのか。ここは悪魔ではなく神のために、肉体の敵ではなく魂の邪惡に抗して建てられているのだ。だから神の僕たちから遠ざかり、今後は害を及ぼすことがあってはならない。神の

僕たちはお前に害をなすことはなく、もしお前が望むならば、神の前で弁護してくれるだろう。しかし、もし止めないならば、神がお前に対しておできになることを目にするだろう。そして救いともなり得たその僕たちの祈りはお前にとって禍となるだろう」。

こうした叱責に領主はまず心を揺さぶられ、次に打ちのめされ、最後には従順に嘆願するように赦しを請うた。赦しを得ると、最初の悪意を捨て、それから援助を提供するようになった。

この建物が高くなり、兄弟たちが巨大な石を機械で運んだところ、機械が重みでギーギーと音を立てて倒れ始め、地面に投げ出されるように傾いた。聖なる人はこれを遠くから見て、急いで走り、十字を切って、重さを自ら支えた。突然、彼がそのように力を加えたので機械はなにか言うよりも早く支えられ、兄弟たちは助けられて重さがないかのように作業を進めた。だから、この徳の人は重さの代わりに軽さをもたらし、兄弟たちはもっと荷が載せられたはずのところで荷を下ろされたのだった。

28. この教会の脇に客人やすべての来訪者のために使徒聖ペテロに捧げられた別の教会を建てた。彼がミサを執り行い、見知らぬ者たちがもたらす不都合から兄弟たちの教会を守るためであった。

さらに、回廊とその周囲の通常の建物を建てた。この中に優雅な泉のある池をつくった。このために30頭の牛でもほとんど動かせないほど非常に重い石をととても大きな祭壇と一緒に運んで来た。1マイル以上も辺鄙で険しい場所を通して驚くべき大変な労力でこのように行ったのだった。しかし、彼には援軍として少なからぬ牛と農民がいた。しかし、神の助けがなくては人の力は無価値であることを神が示すために、楽そうに見える平地では前述の石を運ぶのに非常に苦勞した。一方、旅の必要から山の険しい場所を登り始めると非常に楽々と進めたので、もし山を見なかったら、石を上ではなく下に運んでいるように思ったであろう。聖なる人が駆け上がり、上述したように十字を切り、神の名を祈るとすぐに脇から支え、神

の助けを受けて力の限りを尽くした。こうしてついに上述した石が運ばれ、適切に切られ、くり抜かれ、適当な場所にふさわしくはめ込まれた。これらの石のおかげで今でもこの場所は魅力的で便利である。

29. この頃に、高貴な者も下賤な者も男も女もこの世を捨てて、あらゆるところから修道院に集まり、温和な首をキリストの甘美なくびきにつないだ（シラ 51：34 参照）。この中でも家全体で神の奉仕に回心した、この世の身分では貴族の男性について私たちは言及を避けるべきではないだろう。彼はそのときまで世俗で騎士として仕えていたが、道徳的な誠実さで卓越し、修道服を着た多くの者が真似に値すると思った。正義で名高く不偏不党であり、公の裁判でよく代理人となり、時には裁判人にも選ばれた。そのために、こうした訴訟で友人たちのためになにもせず、正義にすべてを捧げたので、友人たちから頻繁に非難された。すべての旅人を寛大に歓待したが、特に修道者と貧しい聖職者については、学ぼうとする熱意から家に引き留め、必要なものをすべて提供した。通り過ぎる者や門前で叫ぶ者がなにも持たずに通り過ぎたり、ずっと叫んでいたりしないように、彼の家で最初に貧者が叫ぶのを聞く者が直ちに誰の命令も待たずにいつも用意されている施しを与えるべきだと定められた。

神の務めに熱心で敬虔であったので聖職者の教会で小教区のミサを聴いただけでは十分ではなかった。そこから2マイル離れた修道院に行き、大ミサを聴き、日曜や祝日にはいつも断食をして、自分の家に戻った。

このような善き業に熱心であったが、尊敬すべき父であるエティエンヌがこの地方に旅をすることがあった。この男は喜んで歓待し、エティエンヌの振る舞いと言葉に非常に喜び、別の修道院に行く意図を捨て、すぐに家族全員とともに自らを彼に託した。

こうして定められた日に兄弟たちが送られ、彼は自分の子供たちを車に乗せて、妻と家族の男女と家具一式、それから家畜と役畜や日常生活に必要なものを修道院に送った。

やってきた兄弟たちは彼の前で砦と高い建物を壊し、世俗の住居から神の僕にふさわしい修道のための住居を建てたが、これらは今日まで残っている。この場所に豊富にあったすべての武器や兵器は、よい目的に使用できるものを除いて、粉々に壊され、火で燃やされた。前述の男は、すでに述べた人々を除いて、他の多くの者とともに修道院に入り、すぐに修道服を身に着けた。教義や道德の点で非常に秀でていたので、すでに年をとっていたが、様々な位階を経て司祭の位に到達した。この地位に何年も幸せに仕え、こうして最高の死を迎え、神のもとに旅立った。彼の生涯にここで短く触れるのがよいと考えたが、それは私たちの時代には見慣れない、聞くことのない回心の例であるからであり、完全に回心することを望む者は自身の魂をこの世の関心事に連れ戻すようなものを後に残すべきでないことを後の人々に知ってもらいたいからである。しかし、今は私たちの本題に戻ろう。

30. この世から修道生活に回心する女性の数がかなり増大した。神の御右手によってなされた驚くべき変化について誰もふさわしく述べることはできない。実際、彼女たちの多くは非常に高貴な生まれであり、貴族の妻であった。長い間、異なる生活をしてきたが、この貧困と謙遜の生活に自発的に回心した。かつては絹と金で織られた衣服で着飾った人々が、今はスパルト草と粗末なぼろをまとい、貧しい女性の外観と服装を好んだ。かつては顔を化粧し、鏡でずっと自分を見つめ、寝床でいつもぐずぐずするのに慣れた人々が、今は熱心に台所仕事に精を出し、黒く汚れ、鍋の煤で汚れるほど自分を美しいと思うようにまでなった。ジャコウやその他の香水の代わりに煙の臭いを喜んで吸い、贅沢で立派な宴の代わりに節度をもって粗末な食事や多くの残り物を食べた。兄弟たちが力仕事に専念する一方、女性たちは卑しく、恥ずべき仕事、すなわち、野菜や豆を用意したり、台所用品をきれいにしたり、服を洗ったり、住居を掃除したり、他の清掃を熱心に行ったりするような仕事が自分たちの領分であると考えた。

こうした仕事をすべて自分たちのところで行ったが、彼女たちは決して兄弟たちの住居に入らなかったし、院長がいるときや許可があるときを除いて彼女たちに近づく者はなかったし、それも霊的指導のためや仕事を指示するためだけであった。

兄弟たちから遠くないところに住み、建物は隔てられていたが、修道生活で結びつけられていた。しかし、この全き修道生活を送った人は、女性は男性の中で高潔に長くは暮らすことはできないとみなして、どこに彼女たちをふさわしく定着させられるかを考え始めた。このことに非常に悩み、ある日、修道院から2、3スタディオン外出したところ、森の離れた場所で、険しい崖に覆われ、高い山に四方を囲まれた岩場を発見した。ここに暮らす者は空と周囲の山を除いてなにも見えなかっただろう。さらに、この場所は小川に囲まれていた。この川は確かに小さいが、水音が鳴り響いていて、そこからこの場所は名前をとった⁶⁾。したがって、人間から遠く離れているのでこの場所こそが聖なる目的に適うと聖なる人は信じた。孤独という利点に加えて、この場所は森と石の資源が豊富で、石灰を別にすれば、建設のために他の場所からここに運ぶ必要はなかった。兄弟たちが呼ばれるとすぐに、聖霊の導きの下で彼らの霊的な師にして賢い建築家が示したように、土地を切り開き、岩を取り除き、場所を占拠し始めた。多くの必要のために水路を整備し、このおかげで修道院のすべての建物にひとりで十分な水が供給された。しかし、どうしてこれ以上詳しく論じる必要があるだろうか。非常な熱意と執拗さで働いたので2年以内にすべての付属物とともに修道院全体の建設が終了した。

しかし、両方の修道院が完成した今、この物語にも少しの休みがなければならぬ。以下に続く話は別の序言とともに始められるだろう。同様に、読者に配慮すべきであると思われる。書くことと読むことの熱意が沈黙によって回復したときに、この仕事の中断がある意味で労力の軽減となるだろう。

第1巻が終わる。

第2巻の序言が始まる。

聖なる祝福された人、真に私たちの保護者である主オバジヌのエティエンヌの生涯をかつて私たちは部分的に書いた。修道士の兄弟たちの懇願によって、とりわけエティエンヌの後継者のジェロー師の命令によって書くように求められた⁷⁾、それどころか強いられたのであった。師が亡くなったとき、大いなる保護を失ったかのように、私たちは約14年間この実り多い仕事を放棄した。中傷者たちの舌を恐れたためであり、こうした人々は誤っているとか下手であるとか余計な言葉や行いに満ちているとか非難しようといつも新しい作品を待ち構えている。かつて私たちが書いたこのとるにたりない作品についても当時、嫉妬深い口で中傷し、今でも攻撃を止めようとしない。もし私の生き方の邪悪さゆえにこのようにするのであれば、彼らを非難したり、叱責したりしないし、逆に自分を責めるだろう。公正な人物の生涯を描こうとする者が不公正を止めるのは適切なことであり、もしそうできないのならば、恥で赤面するべきである。

しかし、もしこの仕事を未熟ゆえに非難するならば、ある賢い人がこうした状況でためらっている者に対して述べたことを聞くべきである。「飾り気なく語るか、不器用に語りなさい。あるいは望むならば、ガリアの言葉で、しかし、マルタンについて語りなさい」⁸⁾。

同様に、私の語りは未熟であるが、この私たちのマルタンについて語るのをためらわない。彼自身生前は会話の中で世俗的な知恵を示すことはなく、「生ける神の霊によって」(二コリ3:3)話し、世俗の知恵の尊大さを完全に避けた。私は名ではなく徳において、肉体ではなく霊において彼をマルタンと呼んだ。ヨハネが人格ではなく霊においてエリヤであるのと同じである。実際、私が知る限り、生涯や品行や生活態度や信仰の強さ、とりわけ幸福な死の見事な最後という点で聖マルタンを模倣した者はいな

かった。

マルタンが肉体において死者を生き返らせたとしたら、エティエンヌが滅びのうちに沈んでいた多くの男女を永遠の命に呼び戻したことは確かである。彼らの行いは罪深く、生活は破滅していたので、絶望的な病人について言われるように、救いのしるしは見えなかった。実際、娼婦たちについてなにを言うべきであろうか。どんな領主も敵との戦闘に連れて行くことがないほど多くの男を受け入れると貴族の婦人出身の何人かが公に認めているというのに。彼女たちと罪を犯した男の数は定かでないが、どれほど多くの女性が罪を犯したのか、できるならば各自考えてみよう。彼はこうした女性たちを改悛の癒しや恩寵の賜物によって貞潔で最も清い妻としてキリストに捧げたが、このことが肉体における死者を生き返らせるよりも大いなる奇跡であることを私は疑わない。

虚偽という三番目の中傷がまだ残っている。もしこの点で非難する者があれば、私自身がこの目で見たことか信頼できる誠実な人々が語るのを聞いたこと以外はここに何も書いていないことを知るべきである。もし彼らの言葉に関してなにかが変えられたり、減らされたり、増やされたりしているならば、物語の虚偽の問題ではなく、筆者の裁量の問題である。言葉をそのまま移すのではなく、意味を移すのが優れた翻訳者であるからである。福音書を書いた人々は同じ言葉、あるいは同じ数の言葉を使わなかった。あれこれの言葉で自分の目的を果たす者がおり、言葉少ない者もあれば饒舌な者もいた。しかし、この美しく多様な記述は聖なる福音書にかなる虚偽ももたらさず、その尊敬すべき文章はあらゆる真実の源泉である。言葉において異なっているものが物事の意味と真実において一致することがあるからである。

こういうわけで長い間中断していたこの仕事を再開したのである。

元院長の尊敬すべきロベールとエティエンヌの後継者のジェロー師は、いつも私たちの祝福された父の栄誉を称えようと努めていたが、なにより

も、彼の生涯についてかつて始めたことを最後まで書き続けるように命じた。とりわけ今は亡きシトー院長のアレクサンドルは熱心に執筆するように命じた⁹⁾。これにあらゆる方法で要求してくる兄弟たちの懇願が加わった。肉体に現存するエティエンヌを見た者たちがまだ生きている間に私たちが書かなければ、彼らの死後にはこの物語を確認できる者がいなくなってしまうと主張した。しかし、今はこの物語の流れに従おう。

序言が終わる。

第2巻が始まる。

1. 前の巻には院長の称号や職務を引き受ける前に行ったことが知られる聖人の事跡が、兄弟と姉妹が増加して二つの修道院が設立された時代まで収録されている。この二つの修道院は離れており、鐘が一つの修道院で鳴らされると、その音がもう一つの修道院で聞こえたが、かすかな音でいつも聞こえるわけではなかった。

このときまでオバジーヌの兄弟たちは書かれた規則に従っておらず、規則の代わりに尊敬すべき師の掟を用いていた。これは非常に厳しく、困難なものであり、どのような戒律の厳しさも彼らの規律の厳しさに付け加えるものはなかった。「人生はあなたが定められたとおり」(ヨブ14:5)であり、人の指導は師が生きているか、存在している間しか続かないので、教会で承認された別の修道会の誓願を立てるのがよいように思われた。師が死んだときには、書かれた規則の權威が尽きることなく残るのである。修道士の戒律を採用する者もあれば、参事会員の戒律を採用する者もあり、長い間この点について不確かであったが、結局、神の息吹と賢い人々、とりわけ常に彼らに友好的であったクレルモン司教エメリック師の助言により¹⁰⁾、全員が修道士の戒律に同意を与えた。このとき、この地域には上述したダロンを除けば、戒律に従う修道院は存在しなかった。したがって、この修道院に人が送られ、そこから生活様式を教えるために師が受け

入れられた。それから修道士の服を受け取り、すでにできていた修道院に修道女たちを定着させる日を待った。

2. こうして主の受肉の1142年の枝の主日と呼ばれる復活祭の前の日曜日に、リモージュ司教ジェロー師¹¹⁾と多くの敬虔な人々の立ち合いで私たちの尊敬すべき父であるエティエンヌは司教と一緒に来たある院長により修道士とされた。すぐに修道院長に就任し、司教に祝福された¹²⁾。エティエンヌは聖職者であった兄弟全員を修道士として祝福し、残りの者は元の地位にとどまるように定めた。このようになされた後に、司教と聖職者が先に立ち、新院長と新修道士と助修士、修道女たちの敬虔な一団が後に続き、この日にかくも輝かしい見物のために集まった多くの民衆に伴われて、男子修道院から女子修道院へと詩編を歌いながら棕櫚の行列を行った。ああ、なんとという歓喜と畏敬の日であったろうか。この日に教会全体の祝賀に加えて、かくも完全で神に愛される二つの聖櫃が設置された。

最後に、このようになされ、全員が自分のところに戻った後にも、私たちの共通の父であるエティエンヌはここに年長者たちとともにとどまり、この日は食堂で神のはしためとともに食事をした。これからずっとどのような生きるべきかを彼女たちに言葉で教え、手本で示し、肉声で意見を伝えた。それから日没前に出発し、永遠の隔離で彼女たちを保護し、どのような機会でもどのような必要があってもどのような方法でも生きている限りは誰も修道院の囲いを出ないように厳命して定めた。どのようにしてこれほど多くの女性が同時に一つの場所に隔離されたのかは多くの人々には信じられないようであるので——実際、間もなく彼女たちは150人に達した——彼女たちの生活の状態やこの場所の状況について簡単に述べなくてはならない。

3. 彼女たちの教会は縦に十分な広がりを持っていた。上から下へ設置された壁は教会の東側の部分を建物の残りの部分と区別し、内部を完全に独立した二つの建物に見せるが、外側からは一つの建物に見える。上の教

会はより小さく、東に延びているが、そこの北側に扉があり、そこから徹夜や莊嚴ミサの執行のために兄弟たちや担当の者たちが入ってくる。

さらに、教会を二つに分けるこの壁には方形の窓がついている。ここには鉄格子が嵌められ、女性の側の内側は幕で覆われていた。下の方には空いた部分が残されていて、そこから聖体を持つ司祭の手が差し出される。全員であれ、特に病気の者であれ、彼女たちが聖体の拝領をするときには、司祭によって祭壇で拝領された後に、主の身体が恭しくここに運ばれ、幕が除かれ、全員が司祭の手に近づき、敬意と畏怖をもって聖体を拝領する。

実際、修道女が病気のため自分で歩けないようならば、他の人々によってここに運ばれる。多くの者によって手で支えられるか、あるいは遺体のように担架の上で運ばれて、窓のところに置かれる。多くの修道女はここに運んだ人々の手の間で臨終の聖体を受け取った後に息を引き取ったようである。

しかし、どのようなやり方で、いかにして、外にいる者と中にいる者同士が互いに接することなく、院長の指示の下で日々修道士が聖務を行い、集会を開き、告解を聴き、贖罪を課し、死者を運び、埋葬し、他の霊的な援助を与えるのに奉仕したのかを記すのは不要だと私たちは判断した。すべての者に明白であり、私たちは別の話題に進むのを急いでいるからである。

こうしたすべてのために学識のある神を畏れる司祭が存在し、この場所の院長の次に、魂に属する限りで彼女たちへの配慮を特別に任されていた。

実際、女子修道院長の指導の下で中にとどまっている者たちは、日々の聖務、沈黙、規律、労働、それから教会や集会室や回廊や食堂で開かれる他の集会において、決して外出せず、静かに歌うことを別にすれば、修道士と同じように彼女たち自身のやり方で行動する。実際には、歌うのではなく、読むようにして敬虔に日々の時課を祝う。

さらに、決して外出せず、他人が中に入ることもなく、どのようにして肉体的に必要なものの世話がなされるのかを簡単に説明しなくてはならない。回廊の端に二つの扉が向かい合っており、その間に短い、小さな通路があった。女子院長は内側の扉の鍵を保ち、この場所の執事として任命された年長の認められた兄弟が外側の扉の鍵を持っている。上述した司祭の兄弟は特に魂の世話をを行う。修道士たちの助けを受けて、特に修道女のために日々聖務を歌い、聖体を授与し、告解を聴き、罪の赦しを与え、特定の日に説教の後に集会を開くのは彼の務めであった。

他方、管理人ないし門番と呼ぶこの兄弟は俗人であるので外の問題の世話を任される。彼はすべての必要なものを修道院から持ってきて、自発的に与え、護るのでない限り、世俗の人々には何も求めない。

二つの扉の間に様々な種類の食料品、例えば、パンやワインや野菜や木材や豆や健康な者にも病気の者にも役に立つ他のものを集めると、外の扉を備え付けの鍵で閉め、杖で扉を叩く。この音で中の門番を呼び、彼女が扉を開けて、そこに置かれたものを中に運ぶ。もう一方の扉が閉まっていることが確かめられない限り、この二人のどちらもそれぞれの扉を開けることはない。

4. キリストの賜物がなければ、いったい誰が女性に対してこれほど偉大で慎重な明察を持っていたらだろうか。聖霊の導きがなければ、いったい誰が一つ所にとどまり続けるこれほど多くの女性たちに霊的、物的な恩恵を同時に与えることができただろうか。禁域に侵入することなく、兄弟たちの側の嫌悪や不満もなく、魂の危険もなく、物質的な支出もほとんどなくである。いったい誰が4、5人の女性を閉じ込めることができようか。ここでは約150人が隔離されているのである。いったい誰が女性たちのおしゃべりな口を閉ざすことができただろうか。壁とかんぬきで一人の女性もほとんど抑えられないのに、ここでは多くの様々な女性が禁域で口を閉ざしているだけでなく、永遠の沈黙に縛られている。信心のためでなけれ

ば誰も訪問しないような人里遠く離れた場所なのに、いったい誰が庭に出て、野菜を集め、水や木材を運ぶことすら彼女たちに許さなかったのだろうか。

エティエンヌは雇い人ではなく、良い羊飼いであり（ヨハネ 10：11-16 参照）、霊的な損害を引き起こさないよう物的な利益のために外出するのを真の守護者が許さないのは当然である。なんらかの魂の損失に耐えるよりも彼自身がすべてを提供するほうを望んだのである。放浪する女性、特に聖なる処女にどういうことが起こり得るのかを彼は十分に知っていた。実際、女性たちに会いに外出したヤコブの娘のディナに起こったことが知られる（創 34：1-2 参照）。

1000 の事例で証明されなければいいのであるが、実際、神に捧げられ、修道院で揺りかごから養育された多くの女性が、自身の気まぐれからか上長の不注意からか、両親や見知らぬ人からなんらかの利益を得るために外出して貞潔を失ってしまい、物質的な利益を購うことができて、同時に身体と魂の取り返しのつかない喪失を被ってしまうことがある。

聖なる人はずっと以前からこうした危険の害を予見し、外出できないだけでなく、近づけないように自らに託された女性たちに配慮し、彼女たちから罪を犯す機会を、他の者たちから中傷する機会を奪うようにした。どれほど悪意を持ち、私たちの修道院に敵対していても、たとえ望んだとしても、誰も彼女たちの聖性を傷つけることは決してできなかった。

見ることさえ禁じられているのに、どのように罪を犯す余地が残されているだろうか。彼女たちと話をしに行くとき、聞くことはできるが、見ることはできない。それで彼女たちに許されているのは、言葉で益を与えることで、見ることで害を与えることではないことを知るだろう。彼女たちは自分たちが人を見ることが人から見られることも用心している。回廊に座っていて、彼女たちが見ることができる唯一の場所である山頂を誰かが登っているのに気づくとすぐに視線を地面に向けるか、別の場所に移り、

通り過ぎるまでとどまるのである。

5. 彼女たちの愛すべき無垢について何を言うべきだろうか。あまりにも無垢で読んだり、聞いたりして知った町や城が自分たちの山の周りにあると思う者もある。ロトの娘たちのように、全世界が彼女たちの視界と認識から消滅するのも驚くべきことではない。多くはそこで幼い頃から、あるいは揺りかごから育てられたので、世の中で起きていることに完全に無知である。修道院で見るのがないものは何でも存在しないと思うのである。

こうしてこの世の罪に完全に無知であるので、罪から遠ざけられるほどいっそう自らを罪人として深く嘆き、愚かな男がどのように最も重い罪を嘆き悲しむのかを知らないように、彼女たちは最も小さな罪を嘆き悲しむことになる。

しかし、これはほとんど全生涯をここで過ごした者のこととして理解されるべきである。彼女たちの中にはほとんどあらゆる世界を知り尽くし、罪の深淵を経験した者も多く、こうした者にはどんな悪事でも知られないものはなかった。しかし、「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」（ロマ5：20）。多く赦されるほど多く愛するのである（ルカ7：47 参照）。

6. いったい誰が嫉妬まじりの溜息なしに彼女たちの輝かしい死について語れるだろうか。死にゆく者は立ち会う人々の祈りに自らを託し、詩編と祈りの施しを求める。それからすぐに恍惚にとらえられたように眼と手を天上に向けて祈り、祈りの熱情に全霊を捧げる。

亡くなった後に生者のもとに帰ってくる者があり、尋ねられると自分たちや他の人に起こったことや自分たちに必要なことを熱心に語る。最も愛する姉妹を訪れて挨拶をし、自分たちのために特にしてほしいことを伝える。仲間の姉妹の栄光と大なる幸福について語り、他の人々を鼓舞するために彼女たちが手に入れた功德について黙っていない。また、特定の逸

脱行為について姿を見せた者に警告を与え、これを通じて心の秘密を明らかにして他の人々を矯正する。このようにして多くは罪を宣告され、かつてこの世で犯し、忘却に委ねられていた、積年の心に埋まった罪を口で告白して外に追い出し、こうして死者の助けで罪の死を免れる。またここで怠慢に生活していた姉妹たちについても語る。彼女たちは混乱した生活のために聖なる父であるエティエンヌの存在に耐えられないが、生前そうしていたようにそこに立っているのが怠慢な者には恐ろしく見えるからである。一方、エティエンヌは霊的に向上して人生を旅立った者を抱擁し、愛する。父は息子が気に入るように彼女たちが気に入ったのである（箴3：12 参照）。

最後に、幻視でこれを目撃した姉妹、あるいは目撃者から聞いた姉妹の口から確かに聞いたのでなければ、神も知るように、こうしたことのすべてを私は語らなかつたであろう。長く女性について私は語ってきたので——性という点では女性だが、男性的な徳において男性を上回っているのだから女性ではないのだが——ここからは他の話題に移ろう。

7. この間にオバジヌの兄弟たちは隠修士から修道士となり、新しい規則と新しい慣習を日々教えられた。天上の軍団の老兵であったが、修道士の実践には未熟なようであり、信心において既に完全であったが、修道士としては経験不足だった。しかし、彼らはダロンから来た師たちの裁量に従って教えられた。この師たちは修道士の生活と慣習について教え、戒律の掟を身につけさせたが、過酷で分別に欠けていたので、突然の新奇さと厳しい叱責で無垢な兄弟たちを悩ませ、彼らの魂を苦しめた。慣れたものから優しく導き出し、徐々に慣れていないものに導き入れようとせず、兄弟たちがずっとこの規則で教育されてきたかのように、修道規律の完全な遵守を分別もなく要求した。教会でも他の場所でも突然に混乱させ、変更を迫り、非難した。兄弟たちは最も敬虔で学識のある師の下ではこのように訓練されることはなかった。それで、慣れた港のように彼のと

ころに逃げ、師たちの過酷さについてよく不平を述べた。聖なる人は敬虔な父で賢い医者のように混乱した兄弟たちを慰め、聖性の女主人であり女教師である規律の学習は不愉快そうに耐えるべきものではないと述べて言い聞かせた。師たちの厳しさを規律の管理と修道生活の活力と述べたが、この活力はたるんだ生ぬるさで消えてしまい、熱意でより激しく火をつけられるものである。「たとえこれまで神のために多くの困難と厳しい肉体的な労苦に耐えてきたとしても、もし新しく受け入れた修道生活のためにどんな叱責の煩わしさにも耐えるならば、たいしたことではない。とりわけ健全な制度は苦く始まり、甘く終わるのであるから。どんな技も困難なく修得できないし、苦勞なく維持できない。あなたがたは健全な熱意で教育されているのだから、このためにどんな厳しいことが起こっても、勇敢な心で耐えるのだ。いつか苦い種から甘い果実を収穫できるように」。このように述べて、彼は動揺していた者たちを強くし、同時に教えた。また始められた仕事をあくまでも続け、誰も恐れることのないように師たちにも強く警告した。

注

- 1) 『聖ベネディクトの戒律』7章49節。
- 2) ダロンは1114年にサル・ジェローによって創建された。ボンティニーの修道士のロジェが初代院長でシトー派の慣習を導入した。1162年にシトー会に正式に加盟したとされる。
- 3) 9月2日に献堂の祝日を祝っていた。
- 4) 1132年1月30日の雪崩で最初の修道院と7人の修道士が死亡した。第5代院長ギーグは1136年7月27日に死亡した。エティエンヌの訪問は1132年から1135年までの9月2日に推定される。
- 5) 院長ギーグは相談に訪れたレラスのボンスに対してもシトー派の生活様式を推薦している。拙訳「盗賊騎士の回心と改革派修道院の成立：『レラスのボンスの回心に関する論考とシルヴァネス修道院の真の始まりの物語』試訳」中央大学文学部『紀要』（史学）63号、2018年、75頁。
- 6) 女子修道院の名前はコワルー川に由来する。
- 7) ジェローは元ラ・ガルド・デュー院長で第2代オバジーヌ院長（1159-1164）。

- 8) Sulpicius Severus, *Dialogus I*, PL 20, 201.
- 9) アレクサンドルは第 10 代シトー院長 (1168-1178)。
- 10) エメリックはラ・シェーズ・デュー院長の後にクレルモン司教 (1111-1150) となった。
- 11) リモージュ司教ジェロー・ド・シェール (1142-1177)。
- 12) この院長とは abbas であり, エティエンヌはこれ以前は prior であった。